

「いちばん偉い者」

2015年07月17日

ルカによる福音書9章46節～48節。弟子たちの間で、自分たちのうちだれがいちばん偉いかという議論が起きた。イエスは彼らの心の内を見抜き、一人の子供の手を取り、御自分のそばに立たせて、言われた。「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である。」

主イエスは再度、ご自分の死の予告をされた。弟子たちは、そのことについて聞く耳を全く持っていなかった。主イエスの力ある言葉と業を見た彼らは死ぬなど、思いも及ばなかったからである。まして、十字架の死の意味を理解することはできなかった。だから「弟子たちの間で、自分たちのうちだれがいちばん偉いかという議論が起きた」のである。彼らは、エルサレムに上る主イエスの厳しい姿を見て、革命を起こし、ローマからの独立解放をもたらしてくださると期待した。主イエスが解放者として権力を握った時、誰がどの地位を得るかに関心を寄せ、誰がいちばん偉いかが、議論的的になっていたのである。この議論を聞いて、主イエスはどのように思われたであろうか。自分の言葉を聞いていないことを、深い孤独の中で受け止めたであろう。主イエスと弟子たちの思いは天と地ほどの違いがあった。この違いは神の思いを問うことなく、自分自身を求め私たちの思い、そのものである。

そこで、主イエスは一人の子どもの手を取り、自分の傍に立たせた。12人の弟子たちと奉仕する女性たちで構成された宣教団は民衆から篤く慕われていた。子どもを連れた母親たちも大勢集まっていた。誰もが近づき、群れに加わりたくなるような明るく楽しい雰囲気があったのである。

主イエスは子どもに注目させ、「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである」と言われた。親たちは我が子を愛し、先祖伝来の信仰を教え、大事に育てていたことは確かである。しかし社会的には、子どもは律法以前の者として、疎外されていた。宗教的議論がなされる時は、子どもたちを遠ざけていた。その中で、子どもを受け入れる者は主イエスを受け入れる者であり、主イエスを受け入れる者は、主イエスを遣わした神を受け入れる者である。子どもと主イエスと神を同列に扱い、人権のない弱い立場の子どもを受容こそ、主イエスと神と結ばれることであると語られた。

誰がいちばん偉いかと競い合っていた弟子たちは邪魔な子どもを受け入れよという言葉に驚いただろう。そして主イエスは、「あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である」と言われた。考えても見ないような言葉である。偉い者とは社会的に有能で、他に対する影響力を持っている人であろう。人間の社会はいつの世でも、偉いと言われる者たちが権力者として支配している。そして、貧しく、弱い者は底辺に追いやられ、喘いでいるのが常である。主イエスは、これをひっくり返し、社会から疎外されていた人々に神の恵みと祝福の光を当て、小さく、無力な者こそが偉いと評された。この逆説が福音の核心である。主イエスは最も小さくさせられている者の悲しみを我が身の悲しみとして受け止められていたから、「最も小さい者こそ、最も偉い者である」と言われたのである。この言葉を受け入れる者が主イエスに従い、神を信じる者である。